はじめに

新しい知識・情報・技術が飛躍的に重要性を増す，いわゆる「知識基盤社会」においては，「生きる力」を育む理念に基づき，確かな学力を身に付けさせることが一層求められている。児童生徒が生涯において，自己責任を果たし，他者と切磋琢磨しつつ一定の役割を果たすためには，基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ，これらを活用して課題を見いだし，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決するための思考力・判断力・表現力を身に付けることが必要である。

このような社会の要請を踏まえて，学校教育法及び学習指導要領においては，学力の重要な要素として，①基礎的・基本的な知識・技能，②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等，③主体的に学習に取り組む態度の三つが示されている。その中の思考力・判断力・表現力の育成とは，課題に向き合い，解決方法を考え判断し，その思考の過程を自覚的に経て，考えたことを表現する一連の学習を意図的に行うことである。このような学習過程によって，知識・技能の習得や学習意欲の向上も期待される。

県内の教育施策についても同様に，平成21年２月に策定された「鹿児島県教育振興基本計画」においては，「あしたをひらく心豊かでたくましい人づくり」を基本目標とし，特に，「知・徳・体の調和がとれ，主体的に考え行動する力を備え，生涯にわたって意欲的に自己実現を目指す人間」の育成を掲げている。その視点の一つとして，「一人一人が学ぶことの楽しさを知り，基礎的・基本的な知識・技能を習得し，それらを活用して課題を解決するために必要な思考力や判断力，表現力等を身に付ける」ことを挙げており，その手段として県内各学校においても，教科等の学習で言語活動を取り入れた指導が実践されている。

また，当教育センターにおいても，「生きる力を豊かに育てる学校教育の創造」という全体研究主題の下，その一つの視点として「学力向上を図る授業の充実」について調査研究を進めているところである。平成21・22年度は，「自ら考え判断し，表現できる力を育む学習指導の在り方に関する研究」を研究主題として，思考力・判断力・表現力を育成する学習指導の在り方を，教科等の言語活動の充実に焦点を当てて調査研究を行ってきた。成果として，教科等における言語活動の充実の捉え方を明確にし，学習段階に沿った言語活動を指導計画に位置付けることが，児童生徒が意欲的に思考・判断し，表現するという教科等の目標の達成に効果的であるということが明らかになった。

本研究では，平成23年度から２年間にわたり，思考力・判断力・表現力の育成について，学習評価を通して，学習指導の改善に資するよう取り組んできた。授業の目標を明確にし，思考・判断し，それらを表現する言語活動で，その力が児童生徒に身に付いたかを確実に評価し，その後の指導に生かしていく一連の授業実践は，まさに指導と評価の一体化を目指したものである。

本研究が，県内各学校の教科等の学習指導改善に生かされるとともに，指導と評価の一体化により，自ら学び自ら考える力など確かな学力を身に付けた児童生徒を育成する一助となれば幸いである。

第１章　研究主題に関する基本的な考え方

【研究主題】　思考力・判断力・表現力を育成する指導と評価に関する研究

１　思考力・判断力・表現力の指導と評価

本研究は，児童生徒の思考力・判断力・表現力の育成について，学習評価を通じて，学習指導の在り方の改善を図ることを大きなねらいとしている。

近年，県内の各学校においては，社会の要請や各種学力調査からの課題に対応し，思考力・判断力・表現力の育成の有効な手段として，教科等の目標の達成を目指した言語活動を授業に積極的に取り入れるようになった。一方で，児童生徒の活発な言語活動が行われても，思考・判断したり，表現したりする力が十分に身に付いたのかを見取る評価については課題が残されている。この課題については，「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」（以下「報告」という。）においても，児童生徒が学習内容に基づき，どの程度思考したり，表現したりできればよいかを評価することについて，容易ではないと感じている教師が少なくないと同様の分析がなされている。この課題の解決に向けては，教師自身が教科等の目標に照らして，評価するポイントをもつことが重要である。その結果，言語活動が適切に設定され，指導する方向性が明確になると考えられる。これは，児童生徒の学習状況に対する的確な評価を通じて指導の過程や評価方法を見直し，効果的な指導が行えるよう指導の在り方について工夫改善を図っていくという評価の意義につながるものである。

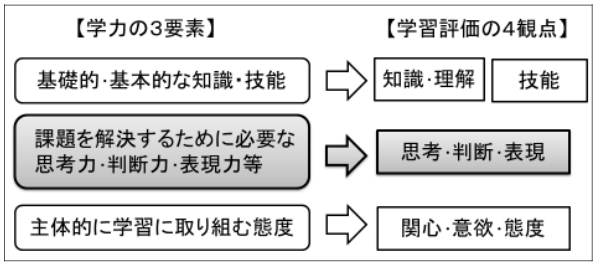

図１　学力の３要素と学習評価の４観点

これまで，各学校においては，児童生徒の資質や能力を適切に見取るため，評価の４観点に基づき評価規準を設定して学習状況を評価してきている。「報告」においては，学習指導要領の目標に照らして，その実現状況を観点別に評価し，目標に準拠した評価を引き続き実施することが示されている。図１は，学力の３要素を踏まえて整理された学習評価の４観点であり，課題を解決するために必要な思考力･判断力･表現力等は，「思考・判断・表現」の観点で評価することとされた。

思考力・判断力・表現力は，基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題解決に当たったり，教科等の内容の理解を深めたりする中で育成されることから，言語活動を通したこれまでの指導を「思考･判断･表現」の評価の面から見直し，確かなものにする必要がある。

２　言語活動を通じた思考力・判断力・表現力の育成とその課題

平成21・22年度は，主体的に学習に取り組む態度を基盤とした思考力・判断力・表現力の育成を「言語活動の充実」を通して行うことについて調査研究を進めてきた。具体的な取組として，これまでの言語活動を見直し，表１のように教科等における思考力･判断力・表現力を育成するための「言語活動の充実」の捉え方を明確にした。

表１　教科等の「言語活動の充実」の捉え方の例

教　科　等	「言語活動の充実」の捉え方
社会・地歴・公民科	地図や統計など各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること，社会的事象の意味，意義を解釈すること，事象の特色や事象間の関連を説明すること，自分の考えを論述することを一層重視すること。

これに基づき，教科等の特性に応じて，言語活動を単元の指導計画に効果的に位置付けたり，

実際の指導を具体化したりするなどして，自ら考え，表現する授業の充実を図ることができた。

しかし，前述のように，児童生徒の思考・判断の過程や表現したものを適切に評価することについては課題が残っている。例えば，思考・判断した結果として表現される児童生徒の記述等を見取る際，教師が思考・判断し，表現する内容に含まれるべき要素や基準を明確にしていない場合があり，表出されたそれぞれの記述等の比較により評価をしているといった課題が挙げられる。そこで，指導と評価は一体であるという観点から，児童生徒が思考・判断したものを表現する一連の学習活動において，的確な評価と併せて，効果的な指導にも生かすことができるよう，含まれるべき要素や見取りの基準をあらかじめ明確にしておくことが必要である。

第２章　思考力・判断力・表現力の育成と評価の実態

１　実態調査

(1)　目的

思考力・判断力・表現力を育成する取組について，県内各学校の状況を把握する。

(2)　概要

1	調 査 名	思考力・判断力・表現力を育成する指導と評価に関する実態調査
2	調査対象	県内全公立小・中・高等学校・特別支援学校（鹿児島大学教育学部附属小・中・特別支援学校を含む）
3	回答状況	小学校569校，中学校246校，高等学校76校，特別支援学校16校（回答率90.9%）
4	調査期間	平成23年10月21日～11月８日
5	調査方法	質問紙調査
6	調査内容	各学校・教科等における思考力・判断力・表現力を育成する指導と評価の状況
7	回答方法	選択肢形式(一部，自由記述)

２　各学校の実態

(1)　思考力・判断力・表現力を育成する言語活動の状況

思考力・判断力・表現力の育成を図る取組として，「教科の特性を踏まえて言語活動に取り組んでいる」のは，全校種の半数以上である。しかし，「単元の指導計画に位置付け，意図的・計画的に取り組んでいる」や「評価と関連付けて取り組んでいる」割合は，30～40%である。目標に沿って意図的・計画的な言語活動を設定する必要がある（図２）。

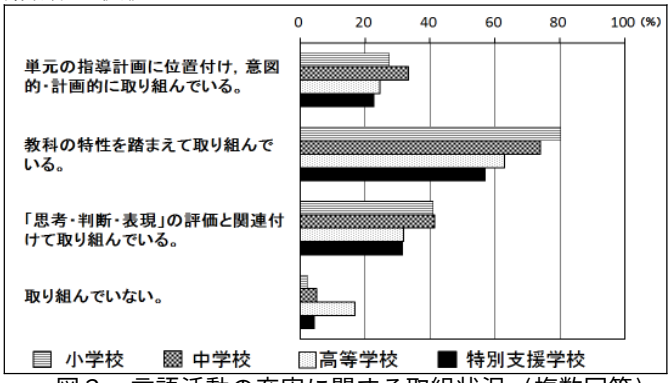

図２　言語活動の充実に関する取組状況（複数回答）

(2)　「思考・判断・表現」の評価の状況

「思考・判断・表現」を見取る評価の資料としては，記述式のテスト，授業中のノートやワークシートを挙げているのが全校種において最も多く，思考の結果を書いて表現したものから見取っていることが分かる。小学校，特別支援学校においては，児童生徒の発言を評価の対象としている割合が高い（図３）。

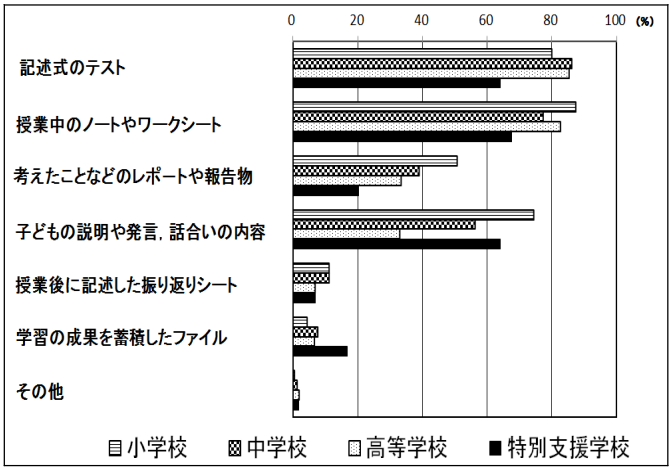

図３　「思考・判断・表現」の評価の資料（複数回答）